

小学校英語科における理科 CLIL の実践

－教科内容の定着と学びに向かう態度の育成－

石田紗由里 [天草市立牛深東小学校]

尾崎亜里紗 [鹿児島市立田上小学校]

石原知英 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

Science CLIL at an Elementary School English Class: Knowledge and Curiosity

ISHIDA Sayuri, OZAKI Arisa and ISHIHARA Tomohide

キーワード : CLIL (Content and Language Integrated Learning)、小学校英語、知識・理解、興味・関心

1. はじめに

2008年(平成20年)に告示された小学校学習指導要領により、2011年から小学校における外国語活動が全面実施されるようになった。このことにより、小学校5、6年生を対象とした年間35単位時間の外国語活動が必修化されたことになる。その後、教育再生実行会議第3次提言や、中央教育審議会の答申を経て、2017年(平成29年)の指導要領改訂で、小学校3年生からの外国語活動の実施と、小学校5、6年生での教科化が示された。2020年(令和2年)からは、この新しい指導要領が全面実施となり、小学校において、教科としての外国語科が動き出したところである。

小学校における英語教育については、指導計画の作成に当たって配慮する事項として「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること」(MEXT, 2017, p.45)との記載があり、「例えば、児童が国語科や音楽科、図画工作科などの他教科等で得た知識や体験などを生かして活動を展開することで、児童の知的好奇心を更に刺激することにもなる」(MEXT, 2017, p.45)と指摘されている。このことを受けて、教科書の題材としても、様々な教科に関連する内容が取り上げられている。しかし、それらの題材をどのように扱うのか、またそれを通してどのような力を養っていくかについては、十分な検討がなされていない。本研究では、小学校5年生の英語科の授業において理科の題材を取り扱う実践を行い、それらを通して、児童の興味・関心が喚起されたか、また授業の主眼である英語の表現や教科内容の知識がどの程度定着したかについての検討を行った。

2. CLIL (Content and Language Integrated Learning) の理念と実践

2.1 CLIL の理念

CLIL (内容言語統合型学習) は、言語教育と他教科などの内容教育とを統合的に扱う教育方法の

総称であり、日本においては、近年小学校の外国語活動を中心に注目されている教授法のひとつである。Coyle et al. (2010) は、CLIL を、教科の学習内容と言語学習の両方を目的とした実践であり、教科の学習を目標言語で行うことを通して目標言語の学習を促すものであるとしている。

CLIL に類似する教授法としては、CBI (Content-based instruction) や TBLT (Task-based language teaching)、イマージョン型の指導がある。これらはいずれも、学習内容と学習言語の双方に注目し、言語を使いながら学ぶという点で共通している。これらのうち、CBI や TBLT は学習内容に注目した指導法であるが、あくまで主たる目的は言語学習にあり、一方、イマージョン型の指導は、各教科を目標言語で指導するが、こちらは言語学習をその目的としない。これらの点に鑑みると、CLIL の特徴は、少なくともその理念上は、学習内容の理解と言語学習という二重の目的を持つ指導スタイルにあるとみることができる。

和泉 (2016) は、「CLIL の特徴を語る上で、『4 つの C』(4Cs) は欠かせない」(p.75) と述べている。4 つの C とは、Content (内容)、Communication (言語)、Cognition (思考)、Community/Culture (協学) である (Mehisto et al., 2008; 和泉, 2016)。これらの要素の関係性として、和泉 (2016) は下記のようにまとめている。

語るべき内容 (content) があるからこそ、他者に伝える手段としての言葉 (communication) が必要になる。また、考えるべき内容があるからこそ、思考 (cognition) が刺激され、広がりや深まりを増していく。さらに、他者との交わり (community) があるからこそ、コミュニケーションが重要になっていく (p.76)

これらの 4 つの要素は、教室内で密接に関わりあっている。教科内容を題材として、教室内で協同的・対話的な学びを実現すること、それを外国語で行うことで、外国語を使いながら学ぶ環境を実現していると言える。

2.2 CLIL 実践の多様性

CLIL の理念は上述の通りであるが、その実践は多様である。池田 (2011) は、授業の目的、授業回数、教科内容の比率、教室での使用言語という 4 つの観点から、多様な CLIL 実践のタイプと特徴をまとめている (図 1)。この類型で捉えるなら、日本における CLIL 実践の多くは、英語の授業の一環で行われること、また他教科の内容を一部取り上げるような形で授業をデザインすることから、Soft, light, partial and bilingual CLIL であると見ることができる。実際、小学校の実践例においては、身近で馴染みのある話題のひとつとして他教科の内容を取り入れるという立場を取るものが多い。他教科で既に学んだこと、あるいは同時期に学んでいることを英語の授業の中で取り上げることで、学習者にとって「学ぶに値するだけの価値があり、学習者にとって何らかの関連性が見いだせる」(和泉, 2011, p. 70) 内容を取り扱うことを可能にしている。そういう意味では、日本における CLIL 実践の多くは、必ずしも教科内容の学びを主眼としてとらえているわけではない。



図1 CLIL のバリエーション

2.3 CLIL 実践の成果と課題

日本の英語教育の文脈では、主に小学校外国語活動の中で様々な CLIL の実践が報告されている。

例えば山野 (2013) は、研究協力者と共に山口県、長野県、埼玉県、東京都、大阪府の公立小学校 5 校全 208 名の児童を対象とした広範な CLIL 実践を行い、授業観察や質問紙調査等を通してその成果を報告している。具体的には、社会科における「食品の産地」や「日本の食糧輸入状況」を題材に、諸外国の国名や食品名、What's this? What are these? などの表現を取り扱う実践や、家庭科の「調理実習 (パンケーキ調理)」を英語で行う実践、理科の「卵生・胎生の動物」を題材として、動物の名前や生息場所、色や数の表現を扱う実践などが挙げられる。児童に対する質問紙調査の結果からは、CLIL 型でない授業実践との比較における顕著な効果は見られなかったものの、授業の楽しさや充実感、また言語理解や内容理解について、概ね高い満足度を得られたと報告している。

二五 (2014) は、広島県の公立小学校に通う 5、6 年生の児童を対象として、社会科の内容を取り入れた CLIL 型の英語授業の実践を報告している。その中では、「世界地図と国旗や時差等の部分により焦点を当て社会科内容の色合いを濃く出す」(p.72) ことを念頭に置き、「国名チャンツや国旗の利用など簡単なものから、国の首都や特産物の学習、やや難しい時差の計算に至るまで様々なレベルの活動」(p.72) を行っている。質問紙によって、(a) 国旗を見て国の名前を英語で言えたか、(b) 世界の時刻を「午前/午後～時～分」と伝えられたか、(c) 世界の時刻を聞いて、日本と他の国の時差が計算できたかについての児童の自己評価を得たところ、(a) と (b) については約 9 割の児童が、(c) については約 7 割の児童が、「とても」ないしは「まあまあ」できると回答していた。また、主に聞くことや話すことについて、年間の授業を通してできるようになったと回答する児童の割合が多いようであった。

二五 (2019) では、広島県の小学校と中学校の事例がそれぞれ報告されている。具体的には、小学校においては、地域のカニ祭りを題材として、郷土料理の調理手順を英語で説明したり、買い物のやりとりやおつりの計算を英語で行うといった、家庭科と算数の題材を組み込んだ CLIL 型の実践を、中学校においては、災害時にどう行動すべきかなどを英語で話し合うことを中心とした活動

を行った。質問紙調査を通して、多くの児童・生徒が授業を楽しく感じていたこと、また「英語でいくらと値段をたずねたり、答えたりできた」や「緊急時にどう行動すべきか、外国人に英語で説明ができた」などといった授業内容に関する自己評価が高いことが報告されている。

松井・藤原(2017)では、愛知県の小学校で算数の内容を取り入れた CLIL 型の授業実践が 2 例紹介されている。この実践では、啓林館が発行する算数の教科書の英訳版 *Fun with Math* と、独自に作成したクラスルームイングリッシュの表現集をもとに、主に計算問題とその答え合わせを英語で行う活動を行っている。教科内容や英語表現の定着度合いなどについての実証的な効果の検討は行われていないが、授業観察を通して、「児童は授業者が話す英語の意味をある程度推測しながら理解することができる」(p.92) と述べている。

上述の先行研究の他にも、小学校における外国語活動が本格的に導入されはじめた 2000 年代後半頃から、さかんに CLIL 型の教育実践が取り組まれてきている。それぞれの実践では、それぞれの工夫があり、またそれぞれの成果が挙げられているといえる。一方で、これらの実践報告における主な関心は、教材や活動事例の提案と報告であり、効果の検証については児童の授業に対する興味・関心を質問紙によって測定したり、児童自身による振り返りや自己評価を分析したりという方法がとられることが多い。これは主に外国語活動の一環として CLIL 型の授業実践が行われてきたためであり、語彙や表現の知識の定着や、聞くこと・話すことといった技能の総括的な評価が必要とされていなかったことも影響している。しかし今後、小学校においても教科としての英語教育が実践される中では、教科内容や英語表現の定着度合いなどについての実証的な検討を行う必要がある。

3. 方法

3.1 研究課題

これまでの実践報告の課題を踏まえて、本稿の研究課題を下記の 2 点とした。

RQ 1: CLIL 型の授業実践を通して、英語の表現と理科の学習内容の両方が身に付くか

RQ 2: CLIL 型の授業実践を通して、児童の英語および理科の学習への興味・関心が高まるか

3.2 対象

本実践の対象は小学校 6 年生 43 名であった。児童らは 3 年次から外国語活動として英語の授業を受けてきているが、CLIL 型の英語授業を受けるのは本実践が初めてのことであった。児童らは普段から英語の授業内で聞くことや話すことを通して語彙や表現に慣れ親しんでおり、言語活動にも積極的に取り組む児童が多い。一方で、文字を読んだり書いたりすることについては、5 年次から段階的に導入しはじめているところであり、書くことを苦手と感じる児童が多いようであった。

3.3 実践

(1) 指導者

本実践は 2 名の教員によるチームティーチングの形態をとった。一人は対象となる小学校の英

語専科の教員で、これまでも継続的に当該クラスの英語授業を担当していた。もう一人は AEA（英会話活動協力員、Assistant teacher of English conversation activities）の教員であり、これまでもこの小学校で授業に参画した経験があった。いずれの教員も日本語を母語とする教員であった。授業は基本的には担任教員が進める形態を取り、AEA の教員は主に言語材料の導入時のチャンツ、発音指導と、ペア活動中の机間巡視の補助を行った。

(2) 教材

本実践の教材として、*New Horizon Elementary English Course 6* の Unit 5: We all live on the Earth という単元を活用した。この単元は、食物連鎖、絶滅危惧種と環境問題を扱う単元であり、理科の授業で既習の内容と関連があるものであった。そのため、本実践の CLIL 型の英語授業として適切であると判断した。

(3) 単元計画

上述の単元について、全 8 時間で単元計画を立案した。それぞれの授業時における具体的な学習内容は表 1 に示すとおりである。実際の指導は、2020 年 10 月から 11 月にかけて行った。

(4) 指導内容と指導上の工夫

単元計画および授業実践において、先述した CLIL の 4Cs（Content: 内容、Communication: 言語、Cognition: 思考、Community/Culture: 協学）については、下記の通り配慮された。

Content（内容）は、理科の学習内容である食物連鎖と絶滅危惧種および環境に関する題材を取り上げた。具体的には、絶滅危惧種のガイドブックを作成することを通して、動物の生態に関する知識（生息地、食性等）を身に付けるとともに、食物連鎖の仕組みや絶滅危惧種を保護する取り組み、人間の活動が環境に与える影響などについての理解を深めることを目指した。

Communication（言語）については、疑問詞（what, where）を使って、動物の食べるものや住んでいるところを尋ねあう活動の中で、様々な動物の名称を聞いたり話したりするとともに、環境に関する用語（例えば food chain, endangered species, IUCN Red List 等）についても触れられるように配慮した。また、既習事項である助動詞 can を活用し、動物の住んでいるところや食べるものに加えて、その動物の特徴（例えば Cheetahs can run fast. 等）を表現する活動を取り入れた。

Cognition（思考）については、様々な活動を組み合わせるように配慮した。具体的には、覚えること（動物の英語名称等）、理解すること（動物の生息地や食性、食物連鎖の仕組み等）、活用・応用すること（新出の言語材料である what や where を使って尋ねあうこと、また既習の表現 can などを活用して表現すること等）、創造すること（イラストと英語の表現を組み合わせるガイドブックを作成すること等）、評価すること（お互いの発表にアドバイスを送りあったり、自分の発表を振り返ったりすること等）の活動を、単元を通して随所に配置するようにした。

Community/Culture（協学）については、ガイドブック作成にあたり、グループで取り上げる動物をそれぞれが決めて取り組めるようにしたこと、またそれについてグループで協力して調べながらガイドブックを完成させられるようにしたことが挙げられる。また、世界各地の様々な地域に住む動物を取り上げることで、多角的な視点から環境問題について考えることができるようにした。

表1 単元計画の概略

授業回	実施日	○授業の狙い ・授業内の活動等
1	10月21日	○単元の見通しと狙い「絶滅危惧種の動物園ガイドを作ろう」を理解する ・地球環境と動物についての動画を視聴する ・様々な動物の英語名称に慣れ親しむ
2	10月26日	○「その動物がどこに住んでいるか」を尋ねあう ・教師のモデル会話を聞いて Where do [animals] live?“ “[Animals] live in [places].” の表現を理解する ・ペアで動物の住んでいるところを尋ねあう
3	10月28日	○「その動物が何を食べるのか」を尋ねあう ・教師のモデル会話を聞いて What do [animals] eat?“ “[Animals] eat [animals, plants].” の表現を理解する ・ペアで動物が食べるものを尋ねあう
4	11月2日	○動物が住んでいる場所や食べるものを尋ねあう ・リレーゲームやペアワークを通して既習表現の定着を図る ・教科書の聞き取り問題に取り組む ・動物の住む環境や食物連鎖について理解する
5	11月4日	○ガイドブックを作成する ・様々な動物の名称を聞いたり話したりする ・ペアで紹介する動物を決め、その特徴などをタブレットを活用して調べる
6	11月9日	○ガイドブックを完成させる ・これまで学んだ動物の名称、動物が住んでいるところや食べるもの、その他の特徴を、イラストと簡単な表現でまとめる ・ペアで選んだ動物についての紹介を練習する
7	11月11日	○クラス内で発表を行う ・様々な動物の名称を聞いたり話したりする ・調べた動物についての発表を交互に行い、さらに必要な情報や説明の仕方などについての振り返りを行う
8	11月16日	○単元全体の振り返りを行う ・絶滅危惧種に関する動画を視聴し、人間の活動が環境に与える影響について考える ・質問紙に回答する

3.4 測定と評価

本実践を通して、目標となる英語と理科の知識・技能が身に付くか、また、それぞれの教科の学習への興味・関心が喚起されるかを検討するため、単元の最後（第8時）に、15分程度の時間で実施できる簡単な質問紙調査を実施した。

質問紙は大きく3つのパートから構成された。第1部は英語の内容を問う設問、第2部は理科の内容を問う設問、第3部は英語および理科の学習に対する興味・関心の度合いを問う設問であった。

第1部の英語の内容を問う設問は6問あり、単元で学んだ単語（動物の名前など）や表現（What, Where）を使った文を聞いて、意味が理解できるかどうか、またそれに対して適切な応答がきめるかどうかを問う項目が含まれていた。第2部の理科の内容を問う設問も6問あり、単元で学んだ用語（食物連鎖、絶滅危惧種、環境問題）を理解しているかを中心に、どういった動物が絶滅危惧種と

して登録されているか、ごみを減らすためにどのような取り組みが行われているか等を尋ねた。これらはすべて、0/1 で採点を行った。使用した問題用紙は付録を参照されたい。

第3部では、本実践を通して英語と理科の学習内容に対する興味・関心が高まったかどうかを尋ねた。質問項目は下記の通りで、英語の学習に関する項目が3つ（英語を使って、友達とたずね合う活動は楽しかったですか；もっと英語を使ってコミュニケーションをしたいと思いましたが；理科以外の教科の内容も英語を使って勉強してみたいと思いましたが）、理解の学習に関する項目が3つ（生き物の暮らしについての勉強は楽しかったですか；生き物の暮らしについてもっと知りたいと思いましたが；生き物と自然環境のつながりについてもっと知りたいと思いましたが）とした。すべて4件法（1: あてはまらない、2: あまりあてはまらない、3: ややあてはまる、4: あてはまる）で回答を得た。

4. 結果と考察

単元の終末に実施した質問紙調査（テストとアンケート）の結果は表2の通りであった。

(1) 学習内容の定着

英語と理科の学習内容がどの程度定着したかについては、それぞれ6点満点の簡単なテストによって測定した。その結果、いずれの内容についても、平均値が満点に近く、十分に理解できていたと判断できる。

個々の設問について見てみると、設問の中で最も正解率が低いものは英語の問2(1)で、79.1%であった。しかし問2(2)の正解率は90%を越えていることから、聞き取る力が十分でないというよりは、問題形式の影響が大きいように思われる。具体的には、問1が終わってから比較的すぐに問2の問題文が流れたために、印刷された問題文を確認する時間が十分でなかったこと、また選択肢が印刷されていない形式の問題タイプに慣れていなかったことが影響していると考えられる。なお、これ以外の問題の正解率もおおよそ90%程度であり、英語・理科ともに満点（各6点、計12点）の児童が27名、11点の児童が10名という結果であった。

多くの児童がほぼ満点に近いスコアを取っている一方で、英語の設問で2点を取った児童が1名、また理科の設問で0点を取った児童が1名いたことについては、注意を要する。これらの児童にとっては、理科の内容を英語で取り扱うことで、理科の内容の理解が十分に定着しなかったこと、あるいは逆に英語の表現に十分に慣れ親しむことができなかったことが考えられる。

表2 英語および理科の学習内容の定着度合いと興味・関心の度合い (n = 43)

	英語				理科			
	M	SD	Min	Max	M	SD	Min	Max
学習内容の定着	5.49	1.06	2	6	5.53	1.26	0	6
学習への興味・関心	9.23	2.05	3	12	8.44	2.13	3	12

(2) 学習への興味・関心

英語と理科の学習を通して、それぞれの学習に関する興味・関心が高まったかどうかについては、それぞれ3項目(4件法)で構成される質問紙によって回答を得た。それぞれの項目群の信頼性係数は、英語の3項目については $\alpha = .75$ 、理科の3項目については $\alpha = .87$ であり、ある程度内的整合性の高いものであると判断された。そのため、それぞれの合計値を、それぞれの教科の学習内容に対する興味・関心の度合いとして集計した。

集計結果からは、多少のばらつきは見られるものの、おおよそいずれの教科についても十分に興味・関心を喚起できていることが示唆された。とりわけ、従来から活用していた語彙の導入のためのピクチャーカード等に加えて、多くの動物の写真や動画を用いながら、児童の理解を深めていくように心がけたこと、また児童自身がペアやグループで相談しながら、自らタブレットを使って動物について調べることなどを取り入れたことによって、児童の興味関心を高めることができたのではないかと考えられる。しかし、ここでもすべての項目に1「そう思わない」と回答した児童が1名いることには注意が必要である。

5. おわりに

本研究では、小学校6年生を対象として、理科の題材を組み入れたCLIL型の英語科の授業実践を行い、授業で取り扱った英語の内容と理科の内容が十分に定着しているかどうか、また実践を通して英語および理科の学習への興味・関心を高めることができるかどうかを検討した。単元の終末に実施した小テストとアンケートの結果から、英語の語句や表現についても、理科の題材についても、十分に理解を図ることができたと考えられた。また、学習への興味・関心の高まりについても、おおむね肯定的な結果が得られた。

本研究の課題としては、以下の3点が指摘できる。まずひとつに、テストの設問が、基本的な知識のみを問うものであったことである。本来は知識・技能のみではなく、それを場面などに応じて活用できる力(思考力・判断力・表現力)の要素も合わせて測定・評価する必要がある。これらは主に授業中の児童らの様子を観察することによって評価を行っているが、それらの観点からの検討も必要となる。また、主に実施時間の都合から、テストの問題数が各6問であったため、十分な信頼性を持つ評価であるとは言えないだろう。

2点目の課題として、ごく少数ではあるものの、テストスコアおよびアンケートのスコアが低い児童がいたということが指摘できる。これらの児童にとっては、理科の内容を英語で取り扱うことで、理科の内容の理解が十分に定着しなかったり、あるいは逆に英語の表現に十分に慣れ親しむことができなかつたりしたことが考えられる。このことは当然、学習への興味・関心を高めることには繋がらない。小学校英語の場合、例えば本単元で学んだ *what* や *where* の表現や動物の名称などについては、他の単元においても繰り返し扱うことになるため、必ずしも本単元の中で十分に定着させなくてもよいものであるが、CLIL型の実践で他教科の内容を扱う際には、児童の理解度等に十分に留意して進める必要があると言える。

最後に、これは本実践に限らず、多くの CLIL 型の実践に共通する課題であるが、本実践をもって理科の当該単元を消化したとは言えないという点についても注意が必要である。先述した通り、小学校における CLIL 型の実践の多くは、Soft, light, and partial なものであり、あくまで英語の授業内に他教科の内容を「題材」として取り入れている形になっている。CLIL の理念は、教科内容と英語の学習が均等に重視され、統合的に学習されるということであるが、現実的には、他教科における学習内容を英語の授業内で再利用・活用するという意味合いであることが多い。これは、語るべき・考えるべき内容として児童の身近な題材である他教科の学習内容を取り上げることで、中身のある英語学習を実現することを目指すものであるが、それだけでは他教科の学習が完了したことにはならない。そのため、教科間の連携に配慮しながら実践を進めていく必要がある。

参考文献

- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge University Press.
- Mehisto, P., Marsh, D., & Frigols, M. J. (2008). *Uncovering CLIL: Content and language integrated learning in bilingual and multilingual education*. Macmillan.
- 池田真 (2011) 「CLIL と英文法指導：内容学習と言語学習の統合」『英語教育』10月号, 34-36.
- 池田真 (2012) 「第1章 CLIL の原理と指導法」池田真・渡部良典・和泉伸一（編）『CLIL（内容言語統合型学習）：上智大学外国語教育の新たな挑戦 第2巻 実践と応用』（pp. 1-15）. 上智大学出版 所収
- 和泉伸一 (2011) 「第3章 第2言語習得研究からみた CLIL の指導原理と実践」渡部良典・池田真・和泉伸一（編）『CLIL（内容言語統合型学習）：上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』（pp. 31-72）. 上智大学出版 所収
- 和泉伸一 (2016) 『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』アルク
- 二五義博 (2013) 「算数の計算を活用した教科横断型の英語指導—小学校高学年児童を対象とした英語の数の学習を事例として—」*JES Journal*, 13, 84-99.
- 二五義博 (2014) 「CLIL を応用した二刀流英語指導法の可能性：小学校高学年児童に社会科内容を取り入れた指導を通して」『小学校英語教育学会誌』第14号, 66-81.
- 二五義博 (2019) 「地域を題材とした小中一貫の英語学習に関する事例研究—CLIL の4Cの視点より—」『中部地区英語教育学会紀要』第49号, 65-74.
- 松井孝彦・藤原康弘 (2017) 「小学校英語活動としてのモジュール型の算数 CLIL 実践」『教職キャリアセンター紀要』第2号, 85-92.
- 山野有紀 (2013) 「小学校外国語活動における内容言語統合型学習（CLIL）の実践と可能性」『「英検」研究助成報告』第25号, 94-126.
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版株式会社

付録

Unit 5 の授業に関する調査

このアンケートは無記名で行い、個人が特定されないようにします。皆さんの成績に関係するものではありませんので、思ったままのことを回答していただきたいです。また、この情報を論文作成以外で用いることはありません。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

Q1 【リスニング問題】 No. 1～No. 4 では、下の生き物の名前を表す英語の音声が入力が2回ずつ流れます。音声と下のイラストが合っていると思うものをア～エの中から1つえらび、記号で答えてください。

No. 1 ()

No. 2 ()

No. 3 ()

No. 4 ()

ア



イ



ウ



エ



Q2 【リスニング問題】 No. 1 と No. 2 は、問題文と選択肢ア～エの音声が入力が2回ずつ流れます。答えとして正しいと思うものを、聞き取ったア～エの中から1つえらび、記号で答えてください。

No. 1 **Where do lions live?** ()No. 2 **What do sea turtles eat?** ()

Q3 ごみを減らすための取り組みとして行われていることは、下の3つのうちどれでしょうか？正しいと思うものを1つえらび、○をつけてください。

(3C , 3R , 3K)

Q4 生き物どうしの「食べる・食べられる」の関係のつながりを何と言いますか？

()

Q5 「絶めつ危ぐ種」についての文章として正しいものには○、まちがっているものには×で答えてください。

ア 絶めつ危ぐ種に登録されている生き物は、10種類だけである。 ()

イ レッサーパンダは、絶めつ危ぐ種である。 ()

ウ シロクマは、絶めつ危ぐ種である。 ()

エ 人間の生活が、自然環境や野生の生き物に悪い影響をあたえることもある。 ()